



「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～ 第1回（6月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

※個人名の掲載については、本人の承諾を得ています。

情義が引き寄せた木津祐子教授

安徽省 江春

今年是中国日国交正常化 40 周年である。「新たな出会い、心の絆」をテーマとする「中日国民交流友好年」の訪れに、私は木津祐子教授のことを思い出した。先生には「先生の中国のペンフレンド、作家の江志偉の娘です。我が家は全員でずっと先生を気にしています。」と声をかけたい。

最近、父はまた 14 年前に頂いた手紙を持ち出して、先生の話をしてくれた。それは 1997 年 1 月 9 日のことである。1 通の航空便が日本の京都から中国の黄山市に届いたのだった。手紙の宛先は、私の父である作家の江志偉である。父は当時「程大位記念館」の館長を兼任していた。父がその職位にあったのは、日本人に「計算の神」と称えられる中国の「珠算の師匠」程大位の伝記を書いたからである。差出人は、京都大学文学部中国語中国文学研究室の木津祐子教授である。その手紙の時点で、木津先生はちょうど中国の南京大学留学から帰国して、京都大学の中国語中国文学研究室に准教授として招聘されたところだった。

この日本からの航空便を遡ると、父と木津先生との間には、私たち一家が今でも感動するような物語があったのである。当時、木津先生は「古徽州」の黄山市に来て、徽州の方言と民間文学を調査研究しており、黄山学院中国文学部の紹介で父を捜し当てたのだった。二人の会談は、木津先生が宿泊する屯溪新安江賓館の客室で行われた。名刺を交換した後、簡単に挨拶をただけで、父はかなり驚かされた—この日本の女性は何と流暢できれいな中国語を話すことかと。その後すぐ、木津先生はレコーダーの録音キーを押した。彼女は父から「屯溪老街の物語」を話してもらったのだ。先生が父に会いたがっていたのは、父が書いた徽州の民話に関するレポートを彼女が新聞で読み、その話が彼女自身も彼女の先生も収集していなかった資料だったので、是非とも補充しなければという理由からだった。

父が中国語標準で語り終わると、木津先生は屯溪方言でもう一度と頼んだ。その振る舞いはまたしても父を驚かせた。—彼女は謙虚な態度で父から教わった「屯溪方言版」から二箇所の翻訳問題について意見をもち出したのである。この日本女性、標準中国語だけでなく、屯溪方言まで使えるとは！

またすぐに父を驚かせる第三の出来事があった。木津先生は 1 冊のノートを取り出して、無造作にページを開くと、とても標準的な休寧県（安徽黄山市が管轄）の方言を繰り出して、休寧民話を見事に朗読したのである。父はそのとき呆気にとられていた。目の前のこの日本女性が、標準中国語と屯溪方言のほかに休寧方言もしっかり話せるとは想像し難かったのである。

父は、彼女の休寧方言について一部の欠点にコメントしてから、彼女のノートをめくってみた。ノートにはびっしりと、流暢で、きれいな漢字で徽州の民話が記録されており、中国語一行ごとに、日本語といくつかの特殊な記号で方言の読み方と音の長さ、語調を明記してあった。

「三度の驚き」を経験した父は、その日、感動覚めやらぬ様子で帰宅した。父は「言葉の面での違いも含め、中日文化の間にはもちろん違いがある。どれも互いに交流し理解し合う上で障害になっているが、木津さんのような精力的な学者の前では、そうした違いも完全に縮めて塞いでしまうことができるものだ。まさに『世に難事はない、よじ登るのみ』だな」と話していた。

それから間もなく、父は木津先生が京都から送ってくれたこの航空便を受け取ったのである。手紙には、舞妓さんの図案が印刷された日本の年賀状が入っており、その中には木津先生から父へ改めて感謝が述べられていた。「この度の黄山訪問では、親切なご指導を賜り誠に恐縮です。」他にも、彼女は非常に「中国的に」私たち一家に対して「恭賀新禧（謹賀新年）」と綴っていた。父が彼女に日本の年号と西暦との換算について質問していたことに対し、彼女はわざわざ日本で出版された『東方年表』を送ってくれたのである。

その手紙が届いた時から、我が家全員は、木津祐子さんという徽州の方言と徽州の文化の研究に熱中する日本の友人の名前を覚えているのである。私たちは、よくネットサーフィンをして木津先生に関する細かな情報を調べています。例えば—彼女が招聘されて京都大学の中国文学研究室に入り、准教授になったこと。彼女が編纂に参与し、既に中日の文化交流の結晶となっている『徽州の方言研究』が日本で出版されたこと。彼女が、『中国語学』誌(256号)編集委員会の編集主幹として『中国語の方言地図集』に見開き2ページの編者注を書いたこと。彼女がもと南京大学の大学院生として南京大学程千帆教授葬儀委員会に弔電を出したこと—など事の大小に関わらず、全てが私たちの心を京都に向かわせ、情義が木津祐子教授を引き寄せるのである。

思うに、父と木津祐子教授という中国と日本の文化人の中の「感動」と「感謝」のエピソードこそ、中日両国民の相互交流、相互理解の一コマであり、一つの縮図なのではないだろうか。